

東大大型センターにおける
ライブラリ利用状況

東大 大型計算機センター
唐木幸比古

東大センターでは、マクロコマンドの利用実態を介して、
ライブラリや言語などの利用頻度統計を調べている。¹⁻²⁾

ここでは、1978年5月～1979年2月の10ヶ月間の
ライブラリ利用状況について報告する。

この間のライブラリ総利用回数は22万回弱に達しており、
これは総ジョブ処理件数70万件の3割以上(延べ比率)
を占めている。1976年4月～1977年3月の1年間で
は 同比が15万回/65万件 ≈ 0.23 ³⁻⁴⁾ であったから、利
用頻度は増していることがわかる。

報告では、分類コード別、使用頻度順上位30プログラム
、および数値解法別—積分、行列の固有値、連立一次方程式
および統計計算—の各統計を紹介する。夏期と冬期の利用
状況の変動についても若干触れる。

1. はじめに

統計の対象となったライブラリは、数学ルーチン・統計・図形・入出力 等の基礎的プログラムおよび結晶解析・原子分子 等の学術的応用プログラムなど 合せて約 630 のプログラムおよびプログラム・パッケージである⁶⁾。この統計には、昨年 10 月以降に公開されたライブラリはまだ含まれていない。また、ライブラリには 東大開発のものメーカー提供のものがあるが、統計ではその区別をしていない。

ライブラリ・プログラムの総量は ソース・カードにして 約 33 万枚である。

分類コードは A1 ~ Y8 の 38 種類あり、各々 教学分野別、学内分野別 等に概略分類整理されている。センター・ライブラリにはこの他 分類コードのつかない無番号ライブラリもあり、これら総体を一括して利用回数を調べている。分類コードのついたライブラリは、ソース公開を原則として運用され、実行・リスト印刷・修正利用・複写 等各コマンドを介して様々に利用されている。コマンドは、ライブラリ・ファイル—磁気ディスク上にある—を定義するレベルの機能を有し、統計は ユーザが各ジョブ内で使用したコマンドおよびその附加オペランド (ライブラリ・コード

名等) をセンター・ファイルに記録蓄積し適宜集計することによって得られる。⁵⁾

以下に示す各統計は、かくして得られた基礎データを、様々な分析集成したものである。

2. 分類コード別利用状況

分類コード・内容	利用回数	分類コード・内容	利用回数
A1 素数	59	H1 線型計画法	669
C2 代数方程式	2,716	I9 入力	17
C3 ガンマ関数、楕円関数等	3,300	J0 電光文字出力	100
C5 超越方程式	904	J6 曲線出力	1,057
C6 ベッセル関数	16,063	J9 出力	11
C7 関数の最大・最小	1,846	P1 紙テープ	3,749
D1 数値積分	8,753	P2 カセットテープ入出力	1,531
D2 常微分方程式	2,985	Q3 補助入出力	9
D4 数値微分	327	Q5 割込・タスク制御	1,621
D6 フーリエ変換	1,939	Q6 異言語間リンク	21
E1 補間法	838	M1 ソート	17
E2 曲線(直線)のあてはめ	3,009	Y0 その他	25
F1 配列演算、逆行列	13,113	Y1 結晶解析	1,953
F2 固有値、固有ベクトル	14,959	Y3 原子核・素粒子	1,500
F4 連立1次方程式	17,414	Y4 原子分子	2,946
G0 基礎統計量	116	Y5 天文	7
G1 統計(HSAP)	29,396	Y6 構造力学	592
G5 乱数	7,960	Y7 植物環境	19
G9 統計	126	Y8 気象	275
SPSS (社会科学)	19,329	DDS III (離散型シミュレーター)	263
GPSS (汎用シミュレーター)	1,659	その他(プロッタ、グラフィック等)	46,588
(1978.5 ~ 1979.2)		合計	215,281

(総ジョブ処理件数 695,274)

これによれば、線形計算・統計・特殊関数・SPSSなどが特によく使われ、次いで数値積分・乱数などが多く利用されていることがわかる。これは毎年似た傾向にある。

3. 使用頻度順—上位 30 プログラム—

数学・統計ライブラリの中で最も利用回数が多いものから
30 プログラムを利用順に示す。

ライブラリ総利用回数	利用回数 (前回順位) ⁶⁾
	215, 281 (81, 748)
① 一様乱数	4, 866 (3)
② 逆行列 (掃出法, 倍精度, 行列の特異性の判定基準値指定)	3, 977 (4)
③ 逆行列 (掃出法, 倍精度)	3, 886 (2)
4 連立一次方程式 (掃出法, 倍精度, 行列の特異性の判定基準値指定)	3, 879 (1)
5 連立一次方程式 (掃出法, 単精度)	3, 293 (6)
6 正規乱数	3, 048 (16)
7 第 2 種変形 Bessel 関数 (倍精度)	3, 030 (8)
8 第 1 種 Bessel 関数 (倍精度)	2, 876 (5)
9 第 1 種 Bessel 関数 (単精度)	2, 706 (7)
10 連立一次方程式 (掃出法, 単精度, 行列の特異性の判定基準値指定)	2, 493 (10)
11 実対称行列の固有値 (ハウスホルダー法・2 分法・逆反復法, 倍精度)	2, 117 (9)
12 第 2 種 Bessel 関数 (倍)	1, 970 (11)
13 数値積分 (ニュートン・コーツ, 倍)	1, 836 (17)
14 実対称行列の固有値 (ハウスホルダー法・QR 法, 倍)	1, 820 (14)
15 第 2 種 Bessel 関数 (単)	1, 749 (13)
16 複素行列の逆行列 (掃出法, 倍)	1, 741 (26)
17 $Av = \lambda Bv$ 型行列の固有値 (コレスキー法・ハウスホルダー法・2 分法・逆反復法, 倍)	1, 650 (12)
18 連立一次方程式 (LU 分解法, 倍)	1, 573 (19)
19 ガンマ関数 (倍)	1, 536 (15)
20 n 元連立一階常微分方程式 (ルンゲ・クッタ・ジル法, 単)	1, 525 (24)
21 逆行列 (掃出法, 単)	1, 443 (18)
22 実対称行列の固有値 (ハウスホルダー法・2 分法・逆反復法, 単)	1, 299 (28)
23 複素行列 (HSAP, 単)	1, 295 ()
24 逆行列 (HSAP, 単)	1, 239 ()
25 $Av = \lambda Bv$ 型行列の固有値 (コレスキー法・ハウスホルダー法・2 分法・逆反復法, 単)	1, 237 (21)
26 実非対称行列の固有値 (QR 法, 単)	1, 218 ()
27 非線形回帰 (修正ガウス・ニュートン法)	1, 145 (31)
28 和, 平均, 標準偏差 (HSAP, 単)	1, 143 ()
29 逆行列 (掃出法, 単)	1, 136 (27)
30 第 1 種変形 Bessel 関数 (倍)	1, 126 ()
31 数値積分 (ニュートン・コーツ, 倍)	1, 105 ()]

(1978.5 ~ 1979.2)

前回 = 1978.10.1 時点
(空白) = 30 番外

これによると、乱数・逆行列・連立一次方程式・ベッセル関数・固有値・数値積分などのプログラムが、個別にはよく使われていることがわかる。利用順は、月単位で若干の入れ替わりがあるようである。3年程前の統計では、単精度ルーチンが上位を占めていたが、この頃は倍精度のものの方がよく使われている。現用マシン（HITAC 8800/8700）の稼動開始が1973年4月であったから、ユーザの多数がマシンの精度等のくせに慣れ親しむようになるのに、数年が費されたことを物語っている。

4. 数値解法別利用状況

ここでは、数値積分（D1）、行列の固有値（F2）、連立一次方程式（F4）および統計（HSAP）（G1）の各ライブラリ・プログラムを数値解法別（方法別）に分類し、その各々の使用頻度の統計を以下の各表に示す。表は、倍精度ルーチンを前面にして構成してあるので注意されたい。

昨年10月の時々の利用状況⁶⁾と比べてそれほど大きな変化は見られないが、数値積分・連立一次方程式などで若干興味深い現象があらわれている。統計を除き、表は比較のため年間と夏期の集計を各々、交互に掲げる。

D1 数値積分 (プログラム総数……33) (A)

期間：1978年5月～1979年2月

	方 法	プログラ ム数	利 用 回 数			備 考
			倍精度	単精度	合 計	
積 分	台 形 則	7	254	84	338	(n = 1)
	ニュートン・コーツ	2	111	74	185	
	変 数 変 換	2	118	3	121	
	二重指数関数	3	25	7	32	
	シンプソン則	2	286	95	381	ニュートン・コーツ (n=2)
	ニュートン・コーツ	6	3,824	2,354	6,178	○主にシンプソン則 ○シンプソン則, 3/8 則 (等間隔, 非〃)
二 重 積 分	ガウス則	6	663	414	1,077	
	ロンバーグ法	4	257	62	319	
		25	5,284	3,009	8,293	
三 重 積 分	シンプソン則	4	93	194	287	
	ガウス則	3	76	75	151	
		7	169	269	438	
三 重 積 分	シンプソン則	1		22	22	
	総 計	33	5,453	3,300	8,753	

D1 数 値 積 分 (プログラム総数…… 33) (B)

期間: 1978年5月～1978年9月 (夏期)

	方 法	プログラ ム数	利 用 回 数			備 考
			倍精度	単精度	合 計	
積 分	台 形 則	7	87	33	120	(n=1)
	ニュートン・コーツ	2	21	31	52	
	変 数 変 換	2	63	2	65	
	二重指数関数	3	3	0	3	
	シンプソン則	2	123	28	151	ニュートン・コーツ (n=2)
	ニュートン・コーツ	6	1,228	954	2,182	○主にシンプソン則 ○シンプソン則, 3/8 則 (等間隔, 非“)
	ガ ウ ス 則	6	228	131	359	
二 重 積 分	ロンバーク法	4	99	5	104	
		25	計 1,765	計 1,151	計 2,916	
	シンプソン則	4	74	35	109	
三 重 積 分	ガ ウ ス 則	3	22	30	52	
		7	計 96	計 65	計 161	
	シンプソン則	1		19	計 19	
総 計		33	1,861	1,235	3,096	

利用回数 の 毎月 の 変化 (数値積分等)

		(夏 期)					(冬 期)						
ライブラリ		5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	計	
数 値 積 分	二重指数関数	3	0	3	0	0	0	3	0	0	1	25	32
	シンプソン則	2	11	39	18	50	33	42	15	48	76	49	381
	ニュートン・コーツ	2	155	279	191	270	184	304	296	359	380	391	2,809
	GPS	1	13	15	19	44	0	16	200	533	584	235	1,659

(1978.5～1979.2)

F 2 行列の固有値 (プログラム総数…… 29) (A)

期間: 1978 年 5 月 ~ 1979 年 2 月

方 法	プログラ ム数	利 用 回 数			備 考
		倍精度	単精度	合 計	
ヤ コ ビ 法	5	1,049	397	1,446	サブスペース法
$\left\{ \begin{array}{l} \text{実 対 称} \\ \text{" (帯)} \\ \text{" (帯) (B}^{-1}\text{A}^*) \end{array} \right.$	2	969	390	1,359	
	2	30	7	37	
	1	50		50	
ベ き 乗 法 実 対 称	2	64	162	226	
ハウスホルダー法・2分法・ 逆反復法	11	4,372	3,226	7,598	コレスキー法 "
$\left\{ \begin{array}{l} \text{実 対 称} \\ \text{" (帯)} \\ \text{" (B}^{-1}\text{A)} \\ \text{" (帯) (B}^{-1}\text{A)} \\ \text{エルミート} \end{array} \right.$	4	2,234	1,346	3,580	
	2	321	478	799	
	2	1,650	1,237	2,887	
	—	—	—	—	
	3	167	165	332	
ハウスホルダー法・QR法	3	1,820	269	2,089	
$\left\{ \begin{array}{l} \text{実 対 称} \\ \text{" (帯)} \\ \text{" (B}^{-1}\text{A)} \end{array} \right.$	2	1,820	245	2,065	
	—	—	—	—	
QR 法	1		24	24	
	7	1,809	1,786	3,595	二段QR法
	2	823	1,218	2,041	
$\left\{ \begin{array}{l} \text{実 対 称} \\ \text{"} \\ \text{複素非エルミート} \end{array} \right.$	2	484	191	675	
	3	502	377	879	
変 分 法 実 対 称	1	5		5	シャヴィット反復法
総 計	29	9,119	5,840	14,959	

* $B^{-1}A$ は $Av = \lambda Bv$ 型の固有値問題, B は正値実対称行列。

F2 行列の固有値 (プログラム総数…… 29) (B)

期間: 1978年5月～1978年9月 (夏期)

方 法	プログラム数	利 用 回 数			備 考
		倍精度	単精度	合 計	
ヤ コ ビ 法	5	487	148	635	サブスペース法
{ 実 対 称	2	{ 436	{ 143	{ 579	
{ " (帯)	2	{ 5	{ 5	{ 10	
{ " (帯)($B^{-1}A^*$)	1	{ 46		{ 46	
ベ き 乗 法					
実 対 称	2	62	158	220	
ハウスホルダー法・ 2分法・逆反復法	11	1.890	1.312	3.202	コレスキー法 "
{ 実 対 称	4	{ 1.065	{ 433	{ 1.498	
{ " (帯)	2	{ 3	{ 241	{ 244	
{ ($B^{-1}A$)	2	{ 777	{ 532	{ 1.309	
{ " (帯)($B^{-1}A$)		{ -	{ -	{ -	
{ エルミート	3	{ 45	{ 106	{ 151	
ハウスホルダー法・ QR 法	3	762	38	800	
{ 実 対 称	2	762	{ 34	{ 796	
{ " (帯)		-	{ -	{ -	
{ " ($B^{-1}A$)	1		{ 4	{ 4	
QR 法	7	846	554	1.400	二段QR法
{ 実 非 対 称	2	515	348	863	
{ "	2	173	144	317	
{ 複素非エルミート	3	158	62	220	
変 分 法					
実 対 称	1	2		2	シャヴィット反復法
総 計	29	4.049	2.210	6.259	

* $B^{-1}A$ は $Av = \lambda Bv$ 型の固有値問題, B は正値実対称行列。

F 4 連立一次方程式 (プログラム総数…… 35)

(A)

期間: 1978 年 5 月 ~ 1979 年 2 月

	方 法	プログラ ム数	利 用 回 数			備 考
			倍精度	単精度	合 計	
直 接 法	LU分解法	6	2, 129	1, 121	3, 250	クラフト法
	{ 実 係 数	2	{ 1, 573	{ 874	{ 2, 447	(実非対称)
	{ " (帯)	2	{ 8	{ 123	{ 131	(")
	{ 複 素 係 数	2	{ 548	{ 124	{ 672	
	改訂コレスキー法	2	590	425	1, 015	
	{ 実 対 称	2	{ 590	{ 425	{ 1, 015	
	{ " (帯)	—	{ —	{ —	{ —	
	コレスキー法	5	87	139	226	
	{ 正 値 実 対 称	3	{ 15	{ 27	{ 42	
	{ " (帯)	2	{ 72	{ 112	{ 184	
反 復 法	掃き出し法	10	5, 634	5, 913	11, 547	ガウス・ジョルダン法
	{ 実 係 数	2	{ 1, 103	{ 3, 293	{ 4, 396	(完全ピボット)
	{ ", 特異性判定	2	{ 3, 879	{ 2, 493	{ 6, 372	(部分 ")
	{ ", 複 数 右 辺	2	{ 86	{ 23	{ 109	(完全 ")
	{ ", ", 特異性判定	2	{ 480	{ 78	{ 558	(部分 ")
	{ ", ", "	2	{ 86	{ 26	{ 112	(完全 ")
		23	8, 440	7, 598	16, 038	
	共役傾斜法	2	328	71	399	実係数 (疎)
	ガウス・ザイデル法	4	100	18	118	
	{ 実 係 数	2	{ 42	{ 12	{ 54	(主対角 > 非対角)
そ の 他	{ ", 特異性判定	2	{ 58	{ 6	{ 64	(三角行列)
	反復改良法	1		830	830	ガウス・ジョルダン法
		7	428	919	1, 347	
そ の 他	最小二乗法	5	248	281	529	
	{ 特 異 値 分 解	1		{ 6	{ 6	ハウスホルダー法・
	{ 重 み な し	2	{ 196	{ 247	{ 443	QR法
	{ 重 み つ き	2	{ 52	{ 28	{ 80	
	総 計	35	9, 116	8, 798	17, 914	

(三) 角 化 (対角化)

F 4 連立一次方程式 (プログラム総数…… 35) (B)

期間：1978年5月～1978年9月 (夏期)

	方 法	プログラ ム数	利 用 回 数			備 考	
			倍精度	単精度	合 計		
直 接 法	LU分解法	6	607	622	1,229	クラウト法	(三 角 化)
	{ 実 係 数	2	{ 537	{ 536	{ 1,073	(実非対称)	
	{ " (帯)	2	{ 2	{ 63	{ 65	(")	
	{ 複 素 係 数	2	{ 68	{ 23	{ 91		
	改訂コレスキー法	2	94	165	259		(三 角 化)
	{ 実 対 称	2	{ 94	{ 165	{ 259		
	{ " (帯)		{ -	{ -	{ -		
	コレスキー法	5	52	26	78		(三 角 化)
	{ 正 値 実 対 称	3	{ 6	{ 13	{ 19		
	{ " (帯)	2	{ 46	{ 13	{ 59		
	掃き出し法	10	2,155	2,105	4,260	ガウス・ジョルダン法	(対 角 化)
	{ 実 係 数	2	{ 420	{ 1,179	{ 1,599	(完全ピボット)	
	{ " , 特異性判定	2	{ 1,530	{ 851	{ 2,381	(部分 ")	
	{ " , 複数右辺	2	{ 23	{ 19	{ 42	(完全 ")	
	{ " , " , 特異性判定	2	{ 157	{ 50	{ 207	(部分 ")	
	{ " , " , "	2	{ 25	{ 6	{ 31	(完全 ")	
		23	計 2,908	計 2,918	計 5,826		
反 復 法	共役傾斜法	2	61	42	103	実係数 (疎)	
	ガウス・ザイデル法	4	51	6	57		
	{ 実 係 数	2	{ 37	{ 3	{ 40	[(主対角>非対角)	
	{ " , 特異性判定	2	{ 14	{ 3	{ 17	[(三角行列)	
	反復改良法	1		199	199	ガウス・ジョルダン法	
そ の 他		7	112	計 247	計 359		
	最小二乗法	5	180	計 216	計 396		
	{ 特 異 値 分 解	1	{	{ 4	{ 4	ハウスホルダー法・QR法	
	{ 重 み な し	2	{ 172	{ 190	{ 362		
	{ 重 み つ き	2	{ 8	{ 22	{ 30		
	総 計	35	3,200	3,381	6,581		

G 1 統計計算 (プログラム総数…… 150)

期間：1978年5月～1979年2月

方 法	プログラ ム数	利 用 回 数			備 考
		倍精度	単精度	合 計	
基礎演算				11,463	
{ 基礎統計量	13		2,163		
{ 行列演算	10		4,731		
{ 補助ルーチン	3		4,569		補助ルーチン(3)
多変量解析				11,355	
{ 重回帰	7		2,655		{ 重回帰
{ 正準相関分析	1		52		{ 多項式回帰
{ 主成分分析	2		479		{ ステップワイズ回帰
{ 因子分析	1		583		{ 非線型回帰 等
{ 副プログラム	22		7,586		含主成分上の回帰
数量化理論				2,538	
{ 第 I 類	1		329		
{ 第 II 類	1		248		
{ 第 III 類	1		132		
{ 第 IV 類	1		346		
{ 副プログラム	15		1,483		
分散分析				83	
{ 分散分析	1		24		
{ 副プログラム	3		59		
時系列分析				3,125	
{ E P A 法等	2		107		含連環比率法
{ センサス局法	1		6		
{ スペクトル分析	1		443		
{ 副プログラム	59		2,569		含補助ルーチン(42)
グラフ作成	5		832	832	含補助ルーチン(1)
総 計	150		29,396	29,396	含補助ルーチン(50)

表によれば、数値積分では 重積分に比べて単積分の利用が圧倒的（一重減を毎に約 20 倍増加、即ち、三重積分：二重積分：単積分 $\approx 1 : 20 : 20^2$ の利用回数比）である。その中では、ニュートン・コーツ系ルーチンが多く使われており、次いでガウス則がよく使われている。数値解析上評価を高めている二重指数関数型ルーチンは、夏期（1978. 10.1 現在）3 件の利用に留まっていたが、今回はその 10 倍になっており、利用の上昇率では GPS（汎用シミュレータ）などと並んで屈指ののびを見せている。その変化を、月毎の統計で少し詳しく見てみる（P. 7 「利用回数の毎月の変化の表」参照）と、同じ高上昇といっても、GPS は夏と冬で階段関数的変化、二重指数関数型は最終月の 2 月にデルタ関数的上昇を見せており、ユーザの動向は異なるように見受けられる。後者のルーチンについては、丁度その 2 月にユーザ向機関誌（センター・ニュース）にて若干のコメントが記載されているので、その影響——教育効果の素過程(?)——が現われたのかも知れない。

行列の固有値では、古典的なヤコビ法にかわって、ハウスホルダー法・QR法などのルーチンが非常によく使われるようになってきている。

連立一次方程式では、相変わらずガウス・ジョルダン系の掃出法ルーチンがよく使われており、直接法の中では、クラウト法やコレスキー法などの三角化ルーチンの利用率は3割弱となっている。ただし、もう少し細かく見ると、直接法内での三角化系の利用率は、夏期 26.9 % だったのが冬期 28.6 %、トータルで 28.0 % と上昇傾向を示している。また、反復法は直接法の利用の $1/10$ 弱となっている。

統計計算 (HSP) では、基礎統計量・行列演算などの基礎演算ルーチンと多変量解析の利用率が各々 4 割近くを占め、残りが時系列分析・数量化理論などとなっている。よく使われる補助ルーチンは行列の印刷などである。

数値積分や行列の固有値では、倍精度ルーチンの方がよく使われているが、連立一次方程式では倍・単両精度ルーチンが同程度に利用されている。

他の分類コードについては省略する。

5. 夏期と冬期の利用状況の変動

1978年5月～9月、10月～79年2月の各5ヶ月
を各々夏期、冬期と呼んで、各期に於けるライブラリ利用状況
の概況を簡単に比較報告する。

以下の表は分類コード別の頻度統計である。

総ジョブ処理件数に対するライブラリ利用回数比率は、
夏期 29.0%、冬期 32.3% となっており、冬の繁忙
期にはライブラリも一層よく使われていることがわかる。

(利用回数)			(利用回数)		
分類コード・内容	夏 期	冬 期		夏 期	冬 期
A1. 素 数	35	24	H1. 線型計画法	139	530
C2. 代数方程式	915	1,801	I9. 入 力	12	5
C3. ガンマ関数, 楕円関数等	3,160	5,140	J0. 電光文字出力	40	60
C5. 超越方程式	201	703	J6. 曲線出力	495	562
C6. ベッセル関数	6,152	9,911	J9. 出 力	6	5
C7. 関数の最大・最小	975	871	P1. 紙テープ	1,612	2,137
D1. 数値積分	3,096	5,657	P2. カセットテープ入出力	910	621
D2. 常微分方程式	1,115	1,870	Q3. 補助入出力	4	5
D4. 数値微分	64	263	Q5. 割込・タスク制御	784	837
D6. フーリエ変換	806	1,133	Q6. 異言語間リンク	16	5
E1. 補間法	182	656	M1. ソート	5	12
E2. 曲線(直線)のあてはめ	1,105	1,904	Y0. その他	12	13
F1. 配列演算, 逆行列	4,957	8,156	Y1. 結晶解析	1,107	846
F2. 固有値, 固有ベクトル	6,259	8,700	Y3. 原子核・素粒子	777	723
F4. 連立1次方程式	6,581	11,333	Y4. 原子分子	1,482	1,464
G0. 基礎統計量	36	80	Y5. 天 文	6	1
G1. 統計(HSAP)	9,484	19,912	Y6. 構造力学	372	220
G5. 乱 数	2,169	5,791	Y7. 植物環境	14	5
G9. 統 計	49	77	Y8. 気 象	144	131
SPSS(社会科学)	6,421	12,908	DDSⅢ(離散型シミュレータ)	185	78
GPSS(汎用シミュレータ)	91	1,568	その他(プロッタ,グラフィック等)	19,773	26,815
(1978. 5～1978. 9) ……夏期			合 計	81,748	133,533
(1978. 10～1979. 2) ……冬期			総ジョブ処理件数	(281,844)(413,430)	

ライブラリ総利用回数に対する各分野の利用比率は以下の通りである。

期 \ 分野	A	C	D	E	F	G	H	I-M	Y	SPSS	シミュ レータ	プロ ック等	計
夏 期	0.04	13.95	6.22	1.57	21.77	14.36	0.17	4.75	4.79	7.86	0.34	24.19	100.0
冬 期	0.02	13.80	6.68	1.92	21.11	19.37	0.40	3.18	2.55	9.67	1.23	20.08	100.0

(パーセント)

これらの表を見ると、夏冬の変化のしかたに、大よそ三パターンがあることがわかる。即ち、

- ①. 数学ルーチン (C, D, F) のように、絶対値 (回数) は増えているが、利用比率はほぼ一定のもの。
- ②. 統計・数教ルーチン (G, SPSS) のように、絶対値はもちろん、利用比率も増えているもの。
- ③. 入出力・学術プログラム (I-M, Y) のように、利用比率は減っているが絶対値はほぼ一定のもの。

がある。この他、GPS Sのように冬期急上昇利用するものや、DDSⅢのように逆に減少するものも若干ある。その背景を考えると様々に空想されて仲々興味深い。ライブラリの利用統計は、数々のソフトウェア評価⁷⁾の、或る側面情報を提供すると共に、東大センターのような数千人ものユーザをもつ共同利用センターで仲々困難とされる 'silent majority' の声なき声を聴く¹⁾一つの道にもなっている。(以上)

終りに、統計データ作りや原稿作成などご協力下さった
 橋本敏子・高橋早苗・大島マリオの各氏に感謝致します。

また、研究会にご招待下さいました一松信先生に御礼申
 上げます。

参考文献

- 1) 橋本：プログラム・ライブラリの使用頻度について，
 センター・ニュース Vol. 6 No. 11・12 (1974) p. 23 (東大).
- 2) 橋本：プログラム・ライブラリの使用頻度カウンタ，
 年報 5号 (1975) p. 63 (東大大型計算機センター).
- 3) 石田：HITAC 8800/8700 システムにおけるジョブ統計，
 10年の歩み (1975) p. 306 (東大大型計算機センター).
- 4) 51年度のジョブ統計，年報 7号 (1977) p. 190.
- 5) 橋本：プログラム・ライブラリの使用頻度と名称エラー
 について，センター・ニュース Vol. 10 No. 7・8 (1978)
 p. 16 (東大).
- 6) 唐木：東大センターにおけるライブラリ開発 (1)~(2)，
 センター・ニュース Vol. 11 No. 1 (1979) p. 73 ; 同
 Vol. 11 No. 2 (1979) p. 32 (東大).
- 7) 一松：数学的ソフトウェアの評価研究会に出席して，
 bit 4月号 (1979) p. 60.